

ニサゴ便所

平成 18 年 4 月 15 日発行

弓削野鳥の会編集発行

「鳥はどこから来てどこへ行く？」

平 山 和 昭

現在の地球を仮に「人間の時代」とよぶとして、今から約 3 億年前の地球には「パンゲア大陸」と云う一つの大陸があり、2 億年前



にそれが分裂を始め、およそ 800 万年前に今のカタチになったのだという。

せいぜい 100 年の人間の命からすれば、千年も万年も、い

や億年単位のことを話題にするのはいささか突拍子もないのだが、いま我々が観察して楽しんでいる野鳥も、実は 2 億年ほどまえに発生し、1 億年ほど前の生物大絶滅期に羽毛を獲得し氷河期を生き延びていた恐竜の子孫だと思えば、例えばカラスの智慧や猛々しさ、群れたがる小鳥の習性などにも、それなりの理由・意味があるのだと納得できる。

地球はこれから氷河期に向かい、さらに大陸は移動をつづけ、最

最終的にはまた一つの大陸、第2パンゲア大陸（超大陸）と地球海だけになるのだと予想されているのだそうだ。もちろんその頃人類はいまのカタチのままで生き残っている筈もなく、そもそも人類が存在するかどうかすらわからない。

氷河期とその後に続く温暖期での海水面の上昇による生物の絶滅期を、それでも矢張り何らかの形態の獲得により生き延びるものはい



るはずで、それらがどういう生き物になっているか、ということを予想した科学読み物がある。

「フューチャー・イズ・ワイルド」（ダイヤモンド社）という本がそれである。その本には驚異の進化を遂げた様々な動植物、2億年後の生命世界が展開されている。

わたしたちに関心の強い鳥については、2億年後にはヒレが翼に進化し、海洋と空を舞台に生きる魚類、オーシャンフリッシュ、その内で主に森林地帯で生きるフォレストフィリッシュが、あたかも現代の鳥類のように盛んに飛び回っているのだという。

さらには陸生イカとして進化し、8本足、8トンもの巨体の、あ

たかも現代の像のように森林地帯をのし歩くメガスクイドとよばれるものも出現している。

人類が絶滅して1億年後に起こった大量絶滅で陸上の脊椎動物は全て死に絶える。そのあとをこうした海洋生物が進出して栄えるのだそうだ。

当然のことだが私たちはその事実を目の当たりにすることは叶わない。しかし未来の小鳥が、実は現在の小魚によって取って代わられるのだと想像すれば、色とりどりの、たとえばギザミや熱帯魚のような小鳥が、森の木々の枝から枝へと飛び回っている様は、実に美しいと言うしかなさそうか。

それにしても、過去5度あったとされる「生物大量絶滅期」は、気候の変化、火山活動、隕石の衝突などで引き起こされたと考えられているらしいが、



次回6度目の絶滅期は、無数の動・植物の生息環境を浸食していった「人類の活動の集積」が引き金になると警告されているこの書物は、楽しいだけではすまない深刻な感情を引き起こして止まない。

大方の人が、自分の寿命を遥かに超えた所で生起する現象には無

関心というのなら、何百劫の世界で生きることを観想している仏典や、天国に生まれたり、そこへ招かれることに心のよりどころを求めるなどというのは、いささか理屈に合わない思いもするのである。

写真説明：枝に逆さまにぶら下がって休む小さなフォレストフリッシュ。魚の胸びれが翼に発達し、浮き袋は空気中で呼吸するのに適したカタチへと進化した。ドゥーガル・デイクソン&ジョン・アダムス著「ザ・フューチャー・イズ・ワイルド」より寸借。

町外遠征・・・瀬戸田にてウミウの巣窟発見 1月29日

寒風吹きすさぶ、1月29日（日）因島・瀬戸田町へと町外遠征に一行（6名）が出かけました。まずは因島の大浜にて、ユリカモメ



の集団に挨拶していこうと寄ってみました。今年は昨年より、ユリカモメの数が一段と増えているように感じました。海岸沿いの護岸の上に一列に並ん

で配給を待っているようでした。近くのおばさんが、「私が悪いのよ、私が餌をやるようになって、こんなに増えたんよ。責任感じているのよ。」と私たちに話しかけてきた。この近辺でユリカモメの集団を

まじかで見れるのもこの時期、ここでしか見れない。バードウォッチャーにとっては大変有難いことである。この周辺の人にはいささか糞害（憤慨）かもね。

ユリカモメとさよならをして、一路瀬戸田に向け車を走らせました。瀬戸田の埋立て地に車を止め、沖合いの小島を見てみると、白くペンキ



を流したような枯れ木に、カラスがたくさん止まっているではありませんか。しかし、双眼鏡で見ると、黒く見えるのはウミウの集団です。また、海岸沿いにはアオサギが点々と見張り番のように佇んでいました。ウミウが木のテッペンに止まっているのも意外に見え



ましたね。だいたい岩の上か、海の上か、海鳥だから、枝の上はやはりおかしいですね。ウミウを堪能し、海岸沿いに車を走らせ、多田羅大橋の橋桁付近を

散策しました。レモン等柑橘類の段々畑、なかなか野鳥は、見当たりませんでした。やはり、地元のフィールド弓削が一番ですね。そ

の後、土産物センターでそれぞれ昼食をとり、耕三寺、平山郁夫美術館付近を散策し、帰路に着きました。

雨の中の台湾（PART 2）

松 本 敏 和

亜熱帯気候にしては数年前に行ったインドネシアに比べると、幾分か過ごしやすいように思える。山や樹木は日本とさほど変わらず、街路樹の椰子の木と無数の単車が目を惹くぐらいだ。韓さんの話では、中国人はハトを食すので、極めて少ないとのことだが、公園では数十羽のドバトが飛び交い、早朝のホテルの窓からも群をなして



飛ぶ姿を幾度も観たので、さほど少ないとは感じなかった。私がまったくいないと感じた鳥は、カラスである。街には餌となるゴミも散乱しているし、適当に樹木も生

い茂っているのに、世界中どこの街にでもいると思っていたカラスを、台北から車で1時間ほど山奥の大漢溪で台湾島の先住民「タイヤル族」の村、烏来（クウライ）温泉郷でもカラスが来ると書くのに、その地名にもかかわらず台湾滞在中に1羽も観なかったことには大変驚いた。また、土砂降りの雨のせいなのか、他の鳥たちも観られず、期待はずれの感をいだきつつも、濁流と化した南勢溪（川）

のわずかに残る藍色も流れや雄大な鳥来瀑布（滝）に心を洗われた。

街でも郊外でも小鳥は頻繁に飛び交い、その距離も近く、あまり人を恐れないように思える。鳥を捕って喰うのならもっと人を恐れるはずなのに？どんな鳥を観たのかと聞かれると、ドバト、スズメ、ツバメ、あとは色鮮やかなヒヨドリぐらいの大きさの鳥を数種ぐらいしか観察できず、いつも予備知識のないまま出掛け、後悔する自分自身が嫌になる。今度こそどんな鳥がいるのか事前に調べてもっと詳しい報告をしたいのだが、いつのことになるやら気長に待っててください。どんよりとした空とバケツをひっくり返したような雨が印象に残った旅だったが、梅雨空を恨み自分の不勉強を悔やんだ台湾に再見！

弓削野鳥の会からのお知らせ（事務局より）

昨年から計画していました弓削野鳥の会のスタッフジャンパーを現在製作中です。5月には現物をお見せすることができると思いますので、楽しみにしててください。胸、肩、背中にイラスト、ロゴが入ります。料金は少し高いですが1着・6,000円ぐらいの予定です。

来年度の定例観察会の予定ですが、大変遅くなりましたが、次のとおり計画しましたので、カレンダーにチェックを入れて忘れないようにしてください。（今月は4月23日ですよ。）

平成18年度弓削野鳥の会活動計画

今年は弓削の鳥をもう一度観察してみましょう。

集合場所：公民館（午前9：00集合） カレンダーにチェックを！

開催日	活動内容	場所	備考
4月23日	夏鳥を探そう	久司山方面	カワセミ コマドリ
5月28日	渡り鳥の観察	三山方面	オオルリ
6月25日	水辺の鳥の観察	佐島方面	アオバズク コチドリ
7月23日	ツバメの観察	上弓削方面	ツバメ
8月27日	弓削の野鳥 (バードリスニング)	三山周辺	アオバズク
9月24日	渡り鳥の観察	三山周辺	サシバ
10月29日	冬鳥の観察	日比方面	ジョウビタキ ハヤブサ
11月26日	猛禽類の識別	狩尾・大谷方面	ハイタカ ノスリ
12月10日	冬鳥の観察	日比・鎌田方面	ベニマシコ サギ類
1月28日	町外遠征	(尾道方面)	
2月25日	冬鳥の観察	久司山方面	ヒレンジャク
3月18日	春を探そう	三山周辺	ツバメ

※雨天の場合は中止

※都合により日時が変更になることがあります。その際には連絡網で回します。

※公民館に集合し、それぞれの車に分乗し観察場所まで行く。

※参加者は各自必ずゴミ袋を持参し、放置されている空き缶などのゴミを拾う等、自然環境の美化に努める。

◎島外観察については旅費：実費個人負担とする。また、弁当等についても各自準備すること。